

13 フランスの辞書の中の日本語 3（事柄編）（2020年11月26日）

フランスの辞書の中の日本語シリーズの3回目は、事柄に焦点を当てます。

日本の伝芸芸能に関する言葉としては、「能」、「歌舞伎」、スポーツでは「柔道」、「柔道家」、「剣道」、「弓道」、「相撲」、「競輪」、文化関連の言葉では「生け花」、「盆栽」、「浮世絵」、「俳句」、「禅」、「忍者」、生活に関する言葉では「布団」、「畳」、「折り紙」、「着物」などがあります。



古典の書物では、「源氏物語」、「古事記」、「古今集」、「太平記」、「六国史」が出ています。この辞書には、源氏物語の作者である「紫式部」も紹介されていますので、いかに源氏物語が広く知られているかが分かります。和楽器では、「琴」はありましたが、尺八や三味線は出ていません。日本人では、能と狂言、古事記と日本書紀はセットで覚えている人が多いのではないかと思います。狂言や日本書紀は辞書には出ていませんので、能や古事記と比べるとフランスではまだ知名度が低いようです。



先日、パリのインテリアショップで、affiche kakémono（注：affiche とは張り紙やビラの意味）という表示を見て、「掛物」という言葉がフランスで使われていることを知りました。



「新幹線」も出ていますので、日本のTGVと説明しなくてもよさそうです。

「腹切」や「神風」など、日本ではあまり使わなくなった言葉がフランスで知られていることが面白いと思いました。辞書には「侍」が出ていますが、日本では武士という言葉の方が多く使われています。

「かわいい」という言葉もフランス人に受け入れられたようです。

「系列」という単語が出ていることも面白いと思いました。系列は、日本独特の仕組みかもしれません。